

World Navi

ワールドナビ Vol. 14
2014 AUTUMN

Navi 特別インタビュー

飛躍のポテンシャルを秘めた国——日本企業最多進出の中欧・ポーランド
ツィリル・コザチェフスキ

駐日ポーランド共和国大使

特別編集 累々たる歴史・豊かな自然・逸品・食文化……多彩なるポーランドの魅力

企業紹介 相澤病院 小説『神様のカルテ』の病院 最先端がん治療、開始!

時事インタビュー “ビジネス・パートナー”としてだけでなく、“情報源”としても大切にすべき『日系人人脈』

国際的 이슈 にフォーカス 米国国立公文書館文書再録

元駐エルサルバドル特命全権大使 湯澤 三郎

“従軍慰安婦”の実態報告書——『娼婦』あるいは『追軍売春婦』に過ぎない!

特別企画 ハンガリーフェア インヨコハマ

いま一番訴えたいこと 参議院議員 西田 実仁 衆議院議員 辻 清人 桶川市長 小野 克典





Navi 特別インタビュー

駐日ポーランド共和国大使

ツィリル・コザチェフスキ

飛躍のポテンシャルを秘めた国

——日本企業最多進出の中欧・ポーランド

リーマン・ショック後も安定的に成長続けるポーランド。実は日本とは経済的なつながりばかりか、深い縁もあり、きわめて良好な関係にある。遠くて近い中欧の国・ポーランドについて、ツィリル・コザチェフスキ駐日大使に話を聞いた。

躍進するポーランド

——先ごろ、ポーランドのトウスク首相が次期EU大統領（正式には欧州理事会議長）に選出されました。

大使 ポーランドにとって今年、共産主義体制が崩壊して民主化に向かった1989年から数えて25周年の記念の年です。我々はその後、1999年にNATOに加盟し、2004年にはEUに入りました。だから今年、NATO加盟15周年の年でもあり、EU加盟10周年の年でもあります。この記念すべき年に、我々のトウスク首相が次期EU大統領に選出されるという榮譽に浴したのです。これはポーランドにとっても、世界にとっても大きな出来事です。

25年前やそれ以前のことを思えば、近年は政治的にも、経済的にも、本当に安定しています。ポーランドの歴史は戦乱に次ぐ戦乱の歴史で、一時は地図上から消えたこともありました。

また、二つの大戦と、共産主義体制のソビエトの影響下に入るという厳しい試練も経ています。そうしてポーランドはいま現代的で安全な民主主義国家に生まれ変わりました。経済の面から言っても、現在、世界でもまれに見る急速な発展の途上にある国として注目を浴びています。

——ポーランドのGDP（国内総生産）は21年連続のプラス成長で、欧州で唯一リーマン・ショックやユーロ危機の下でも成長を維持して世界を驚かせました。この理由はどこにあると考えますか？
大使 いくつかの要因が考えられますが、まず一つは輸出货量が減少せず、安定的だったこと。それから、銀行が適切な資産管理を行っており健全であったこと。そして国の債務残高を対GDP比55%以下に押さえ込んだことでしょう。債務残高が55%を超えそうになると政府が介入して制御するようにしています。不況の際に政治が経

済に介入し、最悪の事態を回避するこの手法は、現在、EU各国で導入されていますが、その先駆けはポーランドだったのです。

——285社の日本企業がポーランドに進出していて中欧では最大です。ポーランドの魅力はズバリ何でしょうか？

大使 まず、ポーランドは中欧最大のマーケットです。そして成長途上の、今後も拡大が期待できる国だということです。また、ポーランド人がきわめて親日的であるということ……。視察に訪れる日本企業は、そのあたりを見ていると思います。

それから、低コストだけれど質の高い労働力。労働者の教育レベルも高いし、人材も豊富です。日本語の学習者も多い。経済特区は14区あり、国外の投資家に魅力的な条件も提供していますし、整備された港湾が二つあり、サービスも充実しています。

さらに言えば、欧州の中間に位置していること。地の利がよく、西欧に対しても、東欧に対しても、生産拠点となり得ます。この地理的条件がゆえに昔は何度も戦争に巻き込まれて苦労しましたが、いまは逆にポーランドの強みになっています。



ツィリル大使はゼスチャーも交え、取材に応じた

ポーランドで、すでに4つの工場が存在します。それから大手では、日立や日本ガイシなど……。昨年では、東海ゴム工業と住友ケミカルエンジニアリングが進出しています。

日本が救った765人の孤児たち

——さきほどのお話にもありましたが、ポーランドは欧州のなかでも特別な親日国として知られ、日本語学習熱も高いし、日本文化も親しまれている。これはどういう理由からでしょうか？

大使 いくつかの理由が考えられますが、大まかに言えば、情緒的・文化的な親和性、それから異文化への対応の共通性、そして歴史的背景に基づく親近感でしょうか。

まず、情緒的・文化的な側面から言うと、ポーランド人と日本人は気質的に非常に近いものを持っています。たとえば、しばしばポーランドの音楽家たちが日本で公演を行っています。日本の聴衆の反応がとてもいい、と口を揃えて言います。繊細で精神性を重んじるようなところが似ています。

逆に、多くのポーランド人が日本文学やマンガなどの文化に非常に関心を持っているのもそのせいだと思います。1920年と22年の2回にわたって日本から船が出され、死線をさまよっていた計765人のポーランド孤児たちが日本の地を踏みました。その後、子供たちは体力を取り戻し、全員が無事ポーランドに帰国しました。

このような素晴らしい思い出があるので、ポーランド人の日本に

でしょう。柔道や空手、合気道といった武術を習う人が多いのも精神性と関わっているように思われます。最近では日本食も人気で、寿司バーなどが増えています。

私個人のことで言えば、黒澤明の映画が大好きで沢山観ました。一方、日本では多くの方からアンジェイ・ワイダの作品に感銘を受けたという話を聞きます。かつて首都であったクラクフには、ワイダの提唱でできた日本美術技術センター『マンガ』があり、設立20周年を迎えた今年6月には安倍昭恵首相夫人も訪れました。

次に異文化への対応ですが、ポーランドは幾つもの国と国境を接し、多民族国家の時代と単一民族国家の時代を両方経験してきました。周囲にはロシア、ドイツ、ハンガリーなどがあり、スウェーデン人が入ってきたこともありま

す。あるいはタタール人のような少数民族も存在します。そうしたなか、独自の伝統文化を守りながらも、これら異民族の多様な文化や制度を上手に取り入れ、独自の文化を形づくってきたのがポーランド人です。

一方、日本は島国で、ポーランドと地理的条件はまったく違っているもの、やはり異文化を取

今後の両国関係

——今後のポーランドの発展に日本はどのようなかたちで寄与できますか？

大使 ポーランドのように急速な発展を続けている新興国にとって、エネルギー面での安全保障は最優先の課題です。日本はすべてのエネルギー分野で最先端の技術を誇る国です。この方面で特に、我々は日本の協力を大いに必要としています。単にエネルギーだけでなく、省エネなど環境分野の技術も積極的に日本から導入させてもらいたいという考えもあります。

——日本の読者へ向けてひと言メッセージを。

大使 これまで日本人にとって、ヨーロッパといえばロンドン、パリ、ベルリンなどの西ヨーロッパのことでした。しかしこれからは、中欧のワルシャワ、プラハ、ブダ

そして、もう一つが歴史的な側面です。過去を振り返ると、ポーランドと日本のあいだには非常に麗しい、感動的な場面がありました。

20世紀初頭、ポーランドはロシア、ドイツ、オーストリアに分割統治され、ロシア領で抵抗運動に参加した人々がシベリアに流刑されていました。また第一次世界大戦の際には、ポーランドがドイツ軍とロシア軍の戦場となったため、戦火を逃れてシベリアに流れ込んだ人たちもいました。両者を合わせると、1920年頃には15万から20万人規模のポーランド人がシベリアに住んでいました。

そこに起こったのがロシア革命とその後の内戦でした。シベリア在住のポーランド人たちはこの世の地獄を経験します。厳寒の大地で宿舎を追われ、荒野を彷徨いながら、深刻な飢餓にさらされたのです。子供たちに食べさせたい一心で何も口にしない母親たちが、つぎつぎに絶命していきました。

見るに見かねたウラジオストク在住のポーランド人たちは、当時シベリアに出兵していたアメリカ、イギリス、フランス、イタリアそして日本の各国に「せめて孤児たちだけでも救出してほしい」と働きかけを行います。ところ



質問に注意深く耳を傾けることも



執務も多忙なツィリル大使

り入れるのが上手い。この点でもやはり両国は似ています。

もちろん、似ているところばかりでなく、まったく違うところもあります。たとえば日本人は慎重で準備に時間をかけ、よく組織されています。それと反対に、ポーランド人は組織を乱してでも結果を急ぐ傾向があります。しかし、こうした違いは大した問題ではなく、むしろさらなる友好の好機と考えるべきで、両国が尊敬しあつて力を合わせるなら、お互いの足りないところを補いあつて大きな事業を成功に導くことができるのではないかと——そう考えています。

ベストにも注目していただきたい。これらの都市を擁するポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーの4カ国で構成されているV4（中央ヨーロッパの地域協力機構。正式名称はヴィシエグラド4カ国）は、さらなる飛躍のポテンシャルを秘めた魅力ある地域です。V4の潜在力に日本の資金と技術が加わった時、素晴らしい成果が生まれるだろうと考えています。そのためにもまず私がやらなければならぬことは、ワルシャワと日本を結ぶ直行便の運行を早期に実現することですね（笑）。



PROFILE

駐日ポーランド共和国大使 ツィリル・コザチェフスキ

1969年生まれ。ワルシャワ大学国際関係学部卒業。95年ポーランド共和国外務省入省。1997年安全保障政策局専門官。1999年ジュネーブ安全保障政策センター（GCSP）にて研究課程修了。2001年から2005年、NATO常駐ポーランド代表部に一等書記官として勤務、軍備管理、拡散防止、核政策に従事。2010年より共通外交・安全保障政策局長およびEU外交政策担当責任者を務める。2012年7月に駐日ポーランド共和国大使に就任。

累々たる歴史・豊かな自然・逸品・食文化…… 多彩なるポーランドの魅力

駐日ポーランド共和国大使館に6年前から勤務し、現在は貿易・投資促進部部長を務めているエリザ・クロノフスカ・シヴァク参事官。ワルシャワ大学の日本語学科を卒業後、日本の熊本大学に留学したのが21歳の時。その後、東大大学院で学び、帰国後はポーランド情報・外国投資庁に入庁。ポーランド語、日本語、英語が堪能な才媛だ。そのエリザさんに母国ポーランドの魅力や、観光と物産の両面から紹介してもらった。



エリザ・クロノフスカ・シヴァクさん

ポウル、スープ皿からティーカップ……と、バリエーション豊富なポーランドの食文化。その上、レンジにもそのまま使えます。日本の伊万里焼のテイストも取り入れていますので、和食の盛り付けにもピッタリです。現在は、東京には専門店もありますし、大型百貨店の催事でも見かけられます。先日のポーランド祭でも一番の人気はやはりボレスワヴィエツ陶器でした」

世界に認められた逸品と バリエーション豊富な食文化

■ボレスワヴィエツ陶器

「ポーランド物産で最近、日本人に一番の人気はボレスワヴィエツ陶器です。ポーランド南西部、ドイツ国境に近いボレスワヴィエツという小さな街で700年以上前から造られているこの陶器は、90年代になってから世界中で知られるようになりまし。共産主義体制の崩壊とともに訪れるようになった米兵らがこの陶器の良質なことに気づき、アメリカに持ち帰ってホームパーティなどで頻りに用いるようになったことがきっかけで、現在は『ポーリッシュ・ポタリー』として広く愛されています。」



手描きのデザインが特徴のボレスワヴィエツ陶器

ボレスワヴィエツ地方にはブール川とクフィサ川が流れ、良質な土に恵まれています。当初は茶色の釉薬が使われていましたが、その後青と白が基調になりました。最近は黄色の地もよく使われるようになりました。

ボレスワヴィエツ陶器の特徴は、なんといつでも二つとして同じ製品がないこと。一つ一つ手描きのデザインなのでどの製品にも微妙な特徴があります。そしてもう一つ言えば、非常に実用性が高いことです。棚に飾っておくだけじゃもったいない。毎日の食事に使ってください。丸皿やサラダ



世界屈指のダウンを使った最高品質のダウンジャケット

ポーランドの鷺鳥は1962年にデンマークから輸入したホワイト・コウダ種という品種で世界でも屈指の良質なダウンを供給してくれます。その品質は日本でも、『トップレベルの羽毛』と評価を受け、ダウンジャケットや羽毛布団などに積極的に利用されています。ただ、最高級品だけあって、お値段がやや高いですが……」

■皮革製品

「陶器に次いで最近、注目を集めているのが、ポーランド祭にも出展のあつた伝統的なハンドメイドの皮革製品。ポーランドの代表的な避暑地であるザコパネの製品が有名で、キエルプツェと呼ばれる革製のモカシンやスリッパ、それからハンドバッグや手提げカバンなどもあります。伝統的な製法を引き継いだ職人たちによる手作



職人たちのハンドメイドによる革製品

りの作品ですから有名ブランドにはない味わいがあります。世界で賞賛されるポーランドの伝統工芸品になってもらいたいと、私たちは期待しています」

■琥珀アクセサリー

「ポーランドの琥珀は昔から有名ですが、特にバルト海に面したグダンスクは、ポーランドの琥珀産業の一大中心地です。先日のポーランド祭にもポーランド琥珀を扱っている販売店さんに参加していただきました。ただ、やはり琥珀ジュエリーというご購入層は圧倒的に年輩の女性の方に限定されてしまい、若い女性にはなかなか興味を示してくれません。若い日本の女性に、どうやって琥珀の魅力に気づいていただくか。デザインやプロモーションも含めて、今後私たちの課題です」



由緒ある琥珀アクセサリー

「個人的には、今後、日本で脚光を浴びるのが、ポーランドの食材ではないかと思っています。実は2年ほど前から『ポーランド・ポーク』に対する人気が高まり、日本への輸出が急激に伸びましたが、あいにくと今年の2月にポーランドの養豚のあいだにASF（アフリカ豚コレラ）という病気が発見され、緊急輸出禁止措置が取られてしまったのです。輸出拡大への期待が高かったのですが、本当に残念です。その代わり、というわけではないですが、今年の8月から滋味深い『ポーランド・ビーフ』の日本への輸入が解禁となりました。」

また、バイソンが食べる薬草を入れた『ズブロツカ』はもう何十年も日本人に親しまれています。が、他にも試していただきたいものがたくさんあります。たとえば、ポーランドはりんごの輸放量が世界一です。日本は衛生法が厳しくて残念ながら生のりんごは輸入できないのですが、たとえばアップルパイやムース、あるいはジュースやシールド（リングのサイダー）などの加工品でもいいですから、ぜひともポーランドのりんごを味わっていただきたい。」

「ポーリッシュ・グース・ダウン」農業省の管理によって大自然のまっただ中で育ったポーランドの鷺鳥はストレスもなく、良質のダウンをまといま。鷺鳥を国家が管理するのは、羽毛を含めた農業セクターが国の経済を牽引する重要部門だからです。」

ポーランドはヨーロッパのなかではまだ手付かずの自然が残っている国です。肉も、乳製品、野菜も、果物も、食材は非常にヘルシーです。そしてそのヘルシーな食材でつくられたポーランド料理をぜひ日本の皆様にもお試しいただきたいところなのですが、残念ながら日本にはポーランド料理のレストランがほとんどありません。味付けは日本人の口にもよく合うのではないかと思いますので、今後どなたかレストランをオープンしてくれることに期待しています。」

ポーランド料理と言えば、たとえば、スープ。寒い国ですから、身体を温めるスープはとも種類が多く、味も抜群です。チキンのスープ、トマトのスープ、キノコのスープ、ビーツのスープ……等々と、数えきれないくらいバリエーションがあるのです。くり抜いたパンのなかにソーセージのスープを注いだ『ジュレック』もポーランドを代表する料理です。発酵したライ麦を使うため、少し酸味があります。現在私の知るところでは、日本

において、日本人と結婚したポーランド女性が開いたポーランド料理



滋味深く、ヘルシーなポーランド料理

理店が1軒あるだけですが、観光や物産ともども、今後ポーランド

王国を偲ぶ歴史と自然が融和する国土

の食事が日本人のあいだに広がってゆくことを願っています」

世界遺産に登録されています。

旧市街には石造りの建造物が並び、路面はすべて石畳で覆われています。旧王宮前の広場は年間を通じて観光客で賑わっています」

■古都クラクフ

「クラクフはポーランドでもっとも歴史のある都市の一つで、ポーランドが共和制になる前の、王国時代の首都でした。ここは戦争被害が少なかったため、旧都の趣ある街並みがそのまま残っています。日本で言えば、京都でしょうか。世界最大規模の岩塩窟である『ヴェリチカ岩塩坑』や、東ヨーロッパで2番目に古いとされる大学で、コペルニクスも卒業した『ヤギェウオ大学』も観光コースになっています」

■商都グダンスク

「バルト海に面した北の都、グダンスクも古い街です。ここはワレサ元大統領の出身地でもあります。かつてハンザ同盟の商都として栄えたこの街には周辺各国か



世界遺産にも登録されたワルシャワ旧市街

らの訪問者も多く、昔から自由な空気が息づいていました。ワレサ元大統領に率いられた民主化運動は、ここから始まりました」

■自然の宝庫、景勝地なども

「ポーランドには、ぜひ訪れていただきたい所がほかにも多々あ

ります。たとえば、王朝誕生の地ポズナン。やはり世界遺産に指定された千年都市のヴロツワフや、『バルト海の黄金』と呼ばれる琥珀海岸、風光明媚なマズーリ湖沼帯、自然動物の宝庫でバイソンも生息するビアウオヴィエジャなど、見どころ満載です」

『ポーランド祭2014』を回想して

「去る9月26日から28日にかけて東京の六本木ヒルズで『ポーランド祭2014』が開かれました。リサイタルやコーラス、フォークダンス、トークショーなどの他、ポーランドの様々な物産が展示されました。ありがたいことに、今年も大勢の方が訪ねてくださり、連日、オープンと同時に大入り満員の盛況でした。けれども、ポーランドがこうして自国の観光や物産のプロモーションに力を入れるようになったのは、実はここ数年のこと。豊かな自然に囲まれて、豊富な観光資源や何世紀にも及ぶ伝統工芸や芸術作品があるのに、ポーランドの人々はこれまで自分の国の文化や歴史を外国の人々に知ってもらおうという意欲が少なすぎたと思います。民主化以降の25年間、ポーランド人は共産主義時代の失われた時間を取り戻そうと、必死にやってきました。が、早く西側のようにという気持ちばかりが強すぎて、母国の伝統や文化をPRというところまで頭がまわらなかつたというのが実情です。けれどもEU経済の優等生と呼ばれ、外国への輸出も、海外からの投資も日増しに増えている現在、いまこそ私たちは祖国の素晴らしい自然や文化や伝統を、もつともっとPRしていくべき時だと痛切に感じています。ポーランドには世界初の発見や発明が実はいろいろあります。チーズケーキもその一つと言われていると聞いたら驚かれるかもしれませんが、そういったことも含め、積極的に発信していきたいと思っています」



■完全再現された首都ワルシャワ
「第二次世界大戦で完膚なきまでに壊滅した首都ワルシャワの旧市街は、戦後60年の歳月のなかで、建築家や修復技術の専門家たちの情熱と国民の支援によって、ほぼ完璧に建設当初の中世の美観を取り戻しました。昔の絵画や写真をもとに、レンガのヒビにいたる細部まで忠実に再現されたのです。その努力が評価されて、1980年には旧市街の街並みそのものが

“ビジネス・パートナー”としてだけでなく、 “情報源”としても大切にすべき『日系人人脈』

北米に次ぐ160万強の日系人を擁する中南米諸国の潜在的なパワーについて、JETRO職員として、また駐エルサルバドル大使として13年の中南米体験を持つ湯澤三郎氏に話を聞いた。

中南米のポテンシャルに 中国が積極アプローチ

——TPP論争が過熱したこともあって、中南米諸国への注目が高まっています。

南米でも太平洋側のペルー、チリ、コロンビア等は政治的に安定した国ですから、貿易相手として有望です。一方、大西洋側でも、ブラジルからアルゼンチンにかけての一带は世界有数の帯水層を抱えているので、この地域は農業のポテンシャルが非常に高い。農業の基本は、まず水ですから。また、



湯澤氏の視線の先には…

南米には手付かずの地下資源が大量に埋蔵されています。

ですから当然のこと、中南米諸国に強い関心を寄せる国は日本ばかりではありません。去る7月には安倍晋三首相が中南米を訪問する直前、中国の習近平主席が中南米諸国を歴訪しました。このことからわかるように、各国が中南米の潜在力を強い関心を示しています。ただ、資源へのアプローチに関する言え、中国や韓国のように先行していますね。この分野では、日本は両国の後塵を拝していると言わざるを得ません。

食糧に関して言えば、日本の商社も広範に活躍しておられるけれど、中国の進出の仕方は日本とはずいぶん違います。中国の農産物輸入は、まず現地で土地を取得することから始まります。ブラジルやアルゼンチンなど大面積の国に入って、広大な農場を取得するのです。土地を購入するのはもち

米諸国の日本に対する信頼が揺らいだと感じたことはありません。

日系人と手を携えて 中南米の地へ

——すると、出遅れたといっても、日本企業にとってはまだまだ進出の余地があると言えそうですね？

はい、そう思います。で、そこでものを言うのが、英国型の情報収集ではないかと考えています。英国は海外に居住する旧大英帝国系住民のネットワークを生かし、現地ならではの情報をしっかりと取っています。たとえば、英国経済誌の『エコノミスト』はインテリジェンス部門専門の別会社を持っていて、コアな経済情報を世界中から集めている。その情報源が世界に散らばった英国系住民です。日本も本来そうしなければいけないのだけれど、残念ながら日本ではまだまだ情報の地位が低いですね。なかなか態勢が整わない。

しかし、中南米には160万の日系人がいるのだから、彼らをもっと活用しない手はないはず。それに、彼らは日本に対して温かい気持ちも持っています。たとえば、戦後、米国から贈られたラ物資。この中には、北米と南米

るん中国系の民間企業ですが、その裏はどうなっているのかわかりません。ブラジルでは農地を取得しようと試みましたが、さすがにこれはブラジル政府によって拒否されています。

ことほど左様に中国の攻勢たるやすさまじく、いまやブラジル、チリ、コロンビアでは、中国は最大の輸出相手国です。さらに現在、アメリカの裏庭とも言えるベネズエラ、パナマ、ニカラグアなどの中南米諸国が、次第に中華経済圏に呑みこまれています。

中南米に根付いた “ハポネス・ガランチード”

——すると、中南米での日本の出遅れ感はありませんか？

そうですね。食糧や資源へのアプローチと同時に、中国は輸出にも積極的に中南米諸国の市場は中

の日系人から日本に送られた救援物資も数多く含まれています。敗戦直後の多くの日本人は、このおかげで飢えを凌ぐことができたわけですね。ちなみに、この物資の2割にあたる80億円相当を負担したのがリオの日系教会でした。現在の価値に直せば、1200億〜1400億円相当です。

いま日本で、どれだけの人がこの事実を知っているでしょうか。今後はもっと大切にし、ともに手を携えてやっていくべきでしょうね。

——もはや、はるかかなたの国ではないと。

そうですね。これまでは物理的な距離感が日本と中南米を隔てていましたが、インターネットの発達とその距離という障壁を取り払ってくれました。いまや中南米のポテンシャルに気づき始めた日本企業からの投資も活発



日系人の大切さを力説する湯澤氏

国製品で溢れかえっています。

しかし、それだからと言って日本という国が中南米で軽く見られるようになったかといえばそんなことはありません。ブラジルには「ハポネス・ガランチード」という言葉があって、これはポルトガル語で「日本人は信用できる」というような意味です。中南米への日本人の植民はすでに1世紀以上も前に始まっていますが、この間、日系人たちが築き上げてきた日本人と日本人の仕事に対する信頼には、絶大なものがあります。

私の最初の海外勤務は1969年にJETRO（日本貿易振興会。現在は日本貿易振興機構）のサンサルバドル事務所長としてでしたが、着任してびっくりしたのは、エルサルバドルにすでに日本企業が進出していたことです。東

もっと日系人をビジネス・パートナーとして、そして情報源として大切にしようという考えが出てくれば、中南米への進出はさらに増えていくはず。PROFILE 湯澤三郎 ユザワ サブロー

1940年、神奈川県生まれ。63年早稲田大学第一政経学部卒業後、日本貿易振興会(当時)入会。北米、中南米に十数年駐在した他、本部在勤中は海外調査部米州課長、経済情報部情報計画課長、海外調査部長、経済情報部長などを歴任し、理事に。その後、駐エルサルバドル特命全権大使等を務める。

忠臣蔵といじめ

時代をこえて忠臣蔵は親しまれてきた。主君の仇討ちのため苦勞に苦勞を重ね、臥薪嘗胆その機を窺い、ついには本懐を遂げた赤穂浪士。江戸市民は待つてましたと言わんばかりに拍手喝采した。主君の仇討ちをするといふ忠孝の精神は、儒教的な考えに支えられている。武士だけでなく町人にも浸透していたのだ。人々は義挙として赤穂浪士を賞讃し、英雄となった義士は名誉ある切腹をして果てていく。

元禄事件（刃傷事件）は元禄14年（一七〇一）三月十四日、江戸城本丸松の廊下（大廊下）で起こった。赤穂藩主浅野内匠頭が高家筆頭吉良上野介に「此の間の遺恨覚えたるか」と啖呵を切つて小刀で斬りつける。殿中で刃傷に及んだ内匠頭は即日切腹を仰せ付けられるも、傷を負った上野介には御構いなし。このとき詳しい取り調べをせず、喧嘩両成敗をできなかつた幕府の裁定が後々尾を引くことになった。この段階から赤穂浅野家家老、大石内蔵助の行動が衆目を集めるようになり、結果はご存じの通りである。



皇居東御苑内

松の大廊下跡の碑

内匠頭が刃傷に及んだ理由を多くの研究者が探つてきたが、おおよそ一致しているのは上野介からのいじめ説である。朝廷からの勅使・院使を迎える式典で、饗応役（接待役）に任ぜられていた内匠頭は、その作法を上野介に教えを受けていた。謝礼が少なかつたためか、わざと間違つた作法を教えられ、意地悪く詰られ、式典の最終日ついに堪忍袋の緒が切れたというものだ。

元禄事件をもとにした忠臣蔵、上野介は憎々しき人物として登場する。いじめをする奴は、いつの時代も悪い。どういふ事情があつたにせよ、いじめる側が悪いのは決まっている。だがよく考えてみると、彼は被害者なのである。悪い奴だからといって、殿中で斬りつけていいことにはならないだろう。吉良邸討ち入りも、上野介側からみればテロにあつたようなものだ。

——私は一般的な忠臣蔵ファンだが、ふとこんなことを考えた。なお、忠臣蔵では悪玉の上野介の実際は、自領をよく治め、領民にも慕われた名君であつたことを付け加えておきたい。人々を洪水から守ろうと私費を投じて造つた黄金堤（愛知県吉良町）が今も残る。

直言

上海のテレビ局が潜入取材で『上海福喜』なる会社のずさんな食肉管理の実態を暴露したのは、記憶に新しい。

これに関連して、問題発覚直後、海外情報に通じる外事関係者はこんな内幕を明かした。

「中国食品問題というと、すぐに毒だとか粗悪だとか報道されがちで、今回も『毒ギョーザ事件』を引き合いに出す向きがありますが、これに限っては背景も関係者もまったく違ってきます。まず、『上海福喜』という会社が米食品卸売大手OSIグループの子会社であることに着目すべきで、ズバリ言ってしまうえば、今回は中国政府による陰謀。彼らが米国との摩擦に対し、対抗措置として仕掛けたというわけです」

事件の背景には中国政府の政治的意図があり、テレビは政府の指示で潜入したというのである。

なるほど、マスコミ統制の厳しい中国ならばあり得ない話ではない。

つい先日、中国メディアを管理する『国家新聞出版ラジオ映画テレビ総局』が、終戦70周年を前に、反ファシズムを題材にしたドラマを制作するようテレビ各局に通達を出したばかりだ。

この手のコントロールは国外でも行われている。駐日中国大使館に在日のメディアを折々、集めて報道内容についての指示を出しているのは周知の事実である。

とはいえ、外事関係者の話にはわかには信じがたい。

すると、同関係者は、これまでの米中間の経済的な熾烈な戦いについていくつかの事例を挙げて説明した。

「今春、米紙ニューヨーク・タイムズ電子版にも出しましたが、米国家安全保障局（NSA）は07年来、中国の通信機器大手・華為技術（ファーウェイ）の本社サーバーに侵入し、任正非最高経営責任者（CEO）らの通信を監視していました。また7月には、米国の安全を脅かすとして大統領令で中止命令が出されていた中国企業による風力発電所建設計画が裁判所の判断で覆されています。こうしたことが明らかにするのは米国の健全さの表れとも言えますが、もちろん氷山の一角。米国は徹底して中国企業を監視し、また活動を妨害しています。中国にしてみれば悔しくてならなかつたはず。そこで、ここ数年、報復の機会を狙い、また策も練ってきましたわけです。そして国際的な経済戦争が始まった。これが真相です」

この外事関係者は、米国系の金融機関が早々に中国から資金を引き揚げていることにも言及したうえで、次なる犠牲者の登場を予測した。

それからおよそ半月後……なんと世界最大の米国スーパー・ウォールマートが不衛生な食品管理で告発されたのである。

「金融などと違ってメーカーはなかなか逃げられない。工場や施設もあれば、たくさん中国人従業員も抱えている。そこを狙い撃ちしているのです。現在、日本のメーカーの多くは、中国が必要としている通信機器等の最先端技術の関係で大目に見られている部分はあるが、うかうかしている場合ではありません」

予測的中させた外事関係者に再び話を聞くと、そう警告を発した。

この直後、日本の自動車部品メーカーが中国当局から独占禁止法違反行為があつたとして多額の制裁金が科されたのだつた。日本に対する経済戦争もすでに始まっているのかもしれない。こうなると、日本もそろそろ国の出番である。内閣の情報機関すなわち内閣情報調査室が情報をまとめて企業にプリーフィングするくらいのことは即、必要ではないか。